

障がい者スポーツを通して社会を拓く



河合 純一 氏（一般社団法人日本パラリンピアンズ協会会長／パラリンピック水泳 金メダリスト）
増子 恵美 氏（公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会、パラリンピック車椅子バスケットボール銅メダリスト）
高橋 陽子（公益社団法人日本フィランソロピー協会理事長） ※モデレーター

ですね。

増子 その後企業に就職し、19歳の時、仕事帰りに事故にあいました。リハビリ中、2度目の事故で脊髄を損傷し車椅子となりました。

ずっと引きこもっていた私を何とか外に出そうと、母が車椅子バスケットボールの情報を持ってきて、毎週のように無理やり練習に連れていかれたのですが、ある時、車椅子バスケットボール教室で、1992年のバルセロナパラリンピックの車椅子バスケットボール代表監督だった三村一郎先生に出会いました。先生に声をかけてもらい、翌年から強化合宿に行くようになりましたが、合宿が終わったら仕事に行く選手を見て、自分がいかに自立していなかったかわかりました。

そこからは、外に目が向くようになって。バスケットボールをしながら、福島県庁で採用された初の車椅子職員として仕事もして、諸事情で中退した高校にも編入して卒業しました。

— お母様の後押しがきっかけなんですね。2度の事故を乗り越えて、一つひとつ壁を突き破りながらここまで来られたんですね。

河合さんは、小さい頃に夢が2つあったとか。

河合 小学生の頃、教師になりたい、水泳で世界一になりたいと思っていました。水泳は5歳で始めて、地元の大会で優勝したりしていたので、速くなりたいとは思っていましたが、世界一を真剣に意識したのは、高校2年です。初めて出たバルセロナ・パラリンピックの後です。

— 6大会連続でパラリンピック出場という偉業のなかでは、スランプや悩みもあったのではないですか？

河合 記録は伸び悩んだりしましたし、大学ではオリンピック選手と一緒に泳ぐので、違いはよく思い知らされたりもしましたが、でも本当にいい水泳部の仲間に出会えたので、結果として楽しく良い思い出がないですね。

— 出会いでいえば、小学校では「教師を目指したい」と思えるような先生に出会い、中学校でも新任の担任の先生が、進路を考える際、大学に進学する視覚障がい者がいるという東京の国立の盲学校の情報を、浜松から上京して調べてくれたり。そういう方々がいたのは大きいですね。

— 誰に出会うかは人生を左右しますね。お二人とも、トップアスリートとして活躍してこられたわけですが、ようやく最近「オリンピック・パラリンピック」と併記されるようになったとはいえ、障がい者スポーツが抱える一番の課題は何だと感じていますか？

河合 2020年の東京パラリンピック大会が決まって、注目されるほど、トップの選手たちには予算がついて、すごく手厚くなっていきます。選手がそれを実感できているかは別としても。

でも、地域で普通に暮らしている障がいのある方々が、スポーツやさまざまな活動をするうえで2020年が追い風になっているかといえ

— 最近さまざまな課題にいきあたると、本当のフェアネス、フェアプレーって何だろうと考えるのです。それで、障がい者スポーツを通してみると、フェアということの本質が見えてくるのではないかと思います。お二人にお話を伺いたいと思いました。まずは、あらためてご自身のこれまでをお聞かせください。

増子 私は内気な子どもで、幼少時は体が弱くて運動もできませんでした。転機は小学校3年。新任の先生が、不登校で体も弱く勉強も遅れていた私を心配して、テニスを教えてくれたことがきっかけで、徐々に体を動かすようになりました。先生が関わっていたスポーツ少年団のバスケットボールに4年生で入部。それまでは集団で同級生とコミュニケーションするのは苦手でしたが、「みんなという」という今までにない感覚や、倒れても周りが助けてくれたことに救われ、中学校で本格的にバスケットボールを始めました。

— 先生とのいい出会いがあったの

ば、全然そこまでいっていません。同じ障がいのある方々から、2020年があまり支持されていないのではと、すごく気になります。

— 障がい者のなかでの格差ということですか？

河合 そうですね。一部の人たちだけで楽しんでいると思われていないだろうかと思っています。地域ということでは、東京も含めてです。

増子 東京でさえそうだから、地方はもっと感じているでしょう。疎外感、取り残された感を少しでもなくすために、地方でもなんとか対策していきたいです。

日本代表クラスや、モチベーションのある選手は、センスとある程度の支援と出会いがあればうまくいく。でも、障がい者が重くてやりたいのにできない人たちが取り残されないようにしたい。

強化という華やかな部分は注目されます。でも、本当にできない人たちのを支える活動には、なかなか陽が

かわい・じゅんいち

1975年生まれ。静岡県出身。先天性の弱視があり、15歳で全盲となる。水泳で1992年バルセロナから2012年ロンドンまで6大会連続でパラリンピックに出場し、メダル21個（金5、銀9、銅7）を獲得した。障がい者アスリートらでつくる一般社団法人日本パラリンピアンズ協会会長、一般社団法人日本身体障がい者水泳連盟会長を務める。独立行政法人日本スポーツ振興センター研究員。

河合 行って楽しかったら続くので、行くまでの道のりを、ガチガチの正攻法でやらなくてもいいと僕は思っています。さまざまな仕掛けがあつていいと思うんですよ。ルールをわかりやすくして認知度をあげる

組むこと、ですね。ロンドンパラリンピックの観客数はラグビーのワールドカップより多くて、サッカーのワールドカップに近づいています。東京でもそれを目指そうと。

—まず、実際に体験して認知してもらう機会を日常からつくらないといけないですね。



河合純一さん

—むしろ変化球でのアプローチですね。増子さん、ご自身の使命や役割をどう感じておられますか？

増子 スポーツ協会に入るまでは、自分のことだけ考えていればよかったのですが、今は広くいろいろな障

とも、「お父さんに連れて行ってもらおう」と思わせるような仕掛けを、子どもや奥さんに対してするとか。国のお金で啓発教材をつくって、人権が大事、パラリンピックが大切と熱く先鋭化して言うほど、逆に一般市民、国民は引いてしまつて結局広まらない気がするんですよ。

たとえば、男性への周知についていえば、パラリンピックの魅力やダイレクトに伝えずとも、「お父さんに連れて行ってもらおう」と思わせるような仕掛けを、子どもや奥さんに対してするとか。国のお金で啓発教材をつくって、人権が大事、パラリンピックが大切と熱く先鋭化して言うほど、逆に一般市民、国民は引いてしまつて結局広まらない気がするんですよ。

がいのこと、それを取り巻く環境、なかなか進まない行政の障がい者事業の啓発など、全般を見なきゃいけない立場です。日本代表という自分の立場をいかに利用して、いかに広く県民に伝えるか。

いま、福島県には8つほど「入口」があります。病院、リハビリステーション、行政、自治体、福祉団体、競技団体、障がい者スポーツ指導員、特別支援学校。どこから入っても、やりたいスポーツや向かいたい方向のスタートラインに立てるような環境を整備したいです。そこから自分で開拓する力や周りのサポートをつくり上げていく、その地区で増やしていく。

河合 8つの窓口あわせると、広報ものすごく大変でしょうね。

増子 広報誌は2500部を年2回、病院、自治体、企業、体育協会、教育関連、県立高校全部に情報が行くようにしています。毎年続けると効果は少しずつあります。そういう泥臭い地道な仕事をしないと広まらないですね。

ますこ・めぐみ

福島県出身・在住。小4でバスケットを始め。1990年に交通事故で車椅子に。92年車椅子バスケットボール教室にて三村一郎先生（現長野県障がい者スポーツ協会理事長）と出会い選手の道へ。2000年シドニーパラリンピックで銅メダル。現役を続けながら、地域における障がい者スポーツコミュニティの形成についても研究している。公益財団法人福島県障がい者スポーツ協会職員、一般社団法人日本パラリンピアンズ協会運営委員、福島県障がい者スポーツ指導者協議会事務局、特定非営利活動法人福島県障がい者スポーツ支援ネットワーク理事。



増子恵美さん

当たらない。だから、私はあえてそこに目を向けて、身近な地域でスポーツができる環境をこの5年間で目指したいです。

一人ひとりの福祉の向上、アクセシビリティやバリアフリーの向上で、まち全体が豊かになると思うのです。障がい者スポーツを、新たな文化として日本に恒久的に根づかせていかないと。

高齢者問題と同じで、自立できるはずの障がい者が自立できず社会の負担になることを避けるためにもです。格差というのは確実にあり、だからこそ、そこに目を向ける

増子 私は、デビューした1994年に2つの国際大会に出て、車椅子競技以外のさまざまな競技や、アジア・オセアニア地域の障がい者を初めて見ました。20年近く前のアジアですから貧富の差が激しく、木の棒を松葉杖代わりにしている選手もいました。私は車椅子になつて落ち込んでいましたが、世界のシヨツキングな障がい者の状況を見て、自分が代表になつて派遣され、いろいろ見聞するのは、地元福島にそれを伝えるためなのだと思います。

必要があると感じています。

—誰も取り残されず、ちゃんと地域で生きていけるような「文化」を、この機会につくっていきけると思いますね。お二人ともトップで活躍されてきたからこそ、そうでない人たちへのまなざしをお持ちなんでしょうね。

田舎ほど、障がいが重くて自分で何もできない人はスポーツはできないと思つています。でも、重度でも水泳やボッチャなど、できるスポーツがあると伝えなきゃと。それと、東京のように障がい者が就労できる環境も整備しなければと思います。

今、福島は、たまたま日本代表である私がいて、被災地ということでもいろいろな支援が受けられるけど、秋田や山形などもう少し北に行くと、もっと難しい状況なんです。だから、福島だけでなく東北にも波及していきたいと思います。

—河合さんは、ご自身の使命や役割についてどう考えておられますか？

河合 仕事の立場でいえば、2020年に金メダルをとれる選手をたくさん増やすこと、世界中から来る選手たちについていい大会だったと思ってもらえるように観客席を満員にする、そのためにチケットを買って応援に行こうと思つてもらえるような体制づくりに取り

いってほしいですね。指導者というテーマも大きいですよ。学校の教科の先生は免許が必要なのに、少年団、クラブ、部活動は、指導者に資格がいらないのは課題の一つです。

増子 私が保護者の方、学校の先生、指導者に言うのは、「子どもたちや選手にはメダルを取ろう！と言いますが、そこがゴールじゃない。メダルを取ることを目標にして、そのプロセスを大事にします」と。

スポーツの競技を通して日常の素行が改善することってたくさんあるんです。特に知的障がいの場合、軽度であればあるほど良い方向に効果が現れるのががんばる、その結果、自信がついて物事に積極的に取り組めるようになっていく。自分の人間としての価値が高まっていく。そして、特別支援学校を卒業した後には仕事を、社会のなかでしっかりと生きていける力をつけることができる。

親御さんたちの心配は、自分が死んだらこの子はどうするのかということなのですが、子どもがスポーツを通して就労して社会の一員として

自立して生きていけることは大きな安心となります。

— 本人もそうですが、親御さん、周りの家族を応援することも大事ですよ。

増子 運動できない最重度のお子さん、我々のところに来れば、預けることもできて保護者の負担も軽くなります。介護で疲れていても一緒に楽しむ時間をつくってあげたい。本人と本人を取り巻く周りの人たちの環境を見ようとしています。

田舎に行くほど「障がいは大変だ！」となりますが、徐々に世界が広がって子どもを連れて買い物に行けるようになったとか、小さな一歩が踏み出せる環境を、スポーツを通じてつくっていききたいです。

— 増子さん自身がいいロールモデルなのですね。

増子 私自身、引きこもりだった時代からはじまって、ここまで世界が広がって、いろんな方に支援していただいて、今度は支援する側にまわ



— 「あなたに届けたい」という思いを感じます。

増子 手の届いていない人たちの目に触れるきっかけを少しでも増やすために、苦手ですがメディアにも出ます。

私は、小学校2年の時に、福島・会津美里町の著名な車椅子のエッセイスト・大石邦子さんの講演を聞いて、子どもながらに泣いたことを、今も覚えています。それを見ると、1000人のうちの何人かの心に私の話が印象に残ってくれば、理解が広がっていくかなとの期待をもって学校にも行きます。全員に何かを響かせたいというのではなく、門を広げる、そこだけにこの20年フォーカスしています。

— だから響くんだと思うんですよ。自分が出る、話すのが好きというのは自分の自己実現で終わってしまうけれど、届けることが自分の使命だというのがぐっときます。

増子 アトランタパラリンピック

の水泳チームの勢いはすごかったですよ。あの時、河合君は時代の波に乗り、その立場を活用して、全国レベルのメディアで発信してくれました。成田真由美さんと。1998年に長野大会が控えていましたが、あそこから日本の障がい者スポーツは大きく転換しました。

メダルの力は大きいと実感したし、河合君たちのスピーチを聞いて、やはり自分ですっかり勉強してパラリンピアンとして応答できるようにならねばと思いました。伝える力が大きかった。

— 河合さんは、もう一つの夢も叶えて、中学校の社会科の先生になられました。今、再びスポーツの世界で活躍されていますが、河合さんの思うフェアプレーについて伺えますか？

昨日、スポーツコースがある高校で講演をしました。インターハイに向かって日々練習しながらも、今日は疲れた、だるいと一生懸命やらない場合と、3歳くらいの幼稚園児が無邪気に走り回って疲れて親御さんにおんぶされて帰るほどがんばった場合を考えると、3歳児のほうがずっと運動価値があると話しました。

結局、「早い、強い、すごい」がすべてじゃないと気づけるのがスポーツだと思うのです。パラリンピックは、持っている能力や機能を最大限出して勝負したらどうなるか、というところでやっています。スポーツの価値や魅力とは、年齢とか性別などすべてを超えて挑戦することだと思っんですよ。それを通じて人とつながるという楽しみもあります。

— 小さいころから思いつきりスポーツをしてほしいですね。

河合 そうですね。競技でなくても、体を動かしていい汗をかいてほしい。いい指導者と出会って続けて



るということに、宿命みたいなものは感じているんです。だから強い選手を育てるのは、そういう役割の方々に任せ、自分は根っここの地域の部分で支えるという分担ができたと思います。

河合 我々の日本パラリンピアンズ協会も地道にやっています。増子さんたちの協力も得て、地域の取り組みを含めて、全体がわかって活動することが重要だと思っています。

— 2020年にむけて、スポーツの魅力を地域でそれぞれに感じながら、障がい者スポーツが広がっていけばいいなと思います。

違いを尊重し、切り捨てず、そのなかで極限までチャレンジする、そこにフェアプレーの本質が見えるように思っています。お二人を見てると希望が見えてきます。今日はありがとうございました！

【2015年12月18日 日本フィランソロビー協会より】